

Title	民族とは何ぞや
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.148- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族とは何ぞや

The Group Mind. A sketch of the principles of collective psychology with some attempt to apply them to the interpretation of national life and character.

By William McDougall. (Cambridge 1920.)

「當代思想の主要なる傾向の一は、専門的分化の傾向である。そして、この趨勢の顯著なること、何れの科目と雖も歴史に及ぶものはない。過去に關する吾人の知識が、非常に擴大し、徹底を期する立派な欲求が生じたる結果として、歴史的研究は、幾多の部門に區分せられ、或は上古史、近代史、或は政治史、外交史、或は經濟史、社會史、或は教會史、考古學的の歴史、或は憲法史、法制史或は海軍史、陸軍史などと、種々の名稱が之に賦與せられ、且つ是等の區劃と雖も、更に年代的に細分せられてゐる。若し一二世紀以上に亘つて、是等主題の一に深く研究を進めようと敢てする研究者があつたならば、非常に大膽なることゝされてゐる。この様に努力を集注することは、正確と

徹底を期するの傾向として明かに利益を存するのであるが、併し顯微鏡的に流るゝの傾がある、又餘りに精細に過ぎると、見界の狹隘を來たすの虞がある。常住一、主題の一小部分の研究に耽つてゐる者は、同種の諸研究より之を解釋するの力を失なふ。その結果として生ずる見解の狹隘は、凡そ世に専門家の談話室コンツェルサチカーネほど忍び難く面白からぬものはない、といへる一皮肉家の言を生せしめた。』とは、ケンブリッジ大學教授、ローズ博士が、一九一九年、トラファルガル海戰記念日に於ける就任演説(1)の冒頭に時弊を指摘せる言であるが、グーチ氏もいへる如くに、他面に於ては、『歴史の範圍は漸次に擴張せられて、遂に人文生活のあらゆる方面を網羅することゝなつた。最早や今日、シイ

リーと共に歴史は國家の傳記であるとか、フリットマンと共に歴史は過去の政治に過ぎないなど、主張せんとするものはないであらう。諸民族の發達、偉人の功績、黨派の消長などは、依然として史家の興味をそゝる主題の中に、數へられてはゐるが、併しながら、自然の影響や、經濟的要因や、思想の起源と變遷や、科學と藝術、宗教と哲學、文學と法律などの貢獻や、生活の物質的條件や、民衆の運命など、言ふが如き問題は、今や尠からず史家の注意を求むることゝなつた。故に、歴史家は、人生の全般を、十分によく觀察しなければならぬ。⁽⁸⁾

かく歴史の研究は、すべての科目に於けると等しく、分化と集化の勢に促されて、内外に深くも廣くもなつたのである。故に、一面には、あく迄も徹底を期する分析的研究があると共に、他面には、之を概括せんとする綜合的研究を生じた。俗にいふ顯微鏡的の見方と望遠鏡的の見方⁽⁹⁾とは之である。この兩種の研究方法は、相俟つて進むべきであるが、その何れが歴史的研究の重點である

かについては、自から議論の分るゝ處であらう。兎に角、諸種の方面より歴史の研究が益盛大に赴きつゝある事は、誠に喜ばしい現象である。「近代的歴史科學は第一に社會心理的の科學である。」⁽¹⁰⁾と喝破して、獨逸史壇に波瀾を生せしめたる故ランプレヒト教授の如きは後者の傾向をとれるものであるが、今、又マクヅーガル氏は、その專門とする社會心理學の見地より歴史の問題に觸れ、過去の歴史哲學が新形體をとれるものは新心理學であらねばならぬとし、「民族精神の理會は民族の歴史の解釋に缺くべからざる基礎である。」⁽¹¹⁾と唱へてこの方面の研究に一新生面を開いてゐる。

本書は其著、Introduction to Social Psychology, 1908.の續篇として記されたものである。こは、著者の自白せる如くに、人生には限りがある。十五年前に着手したこの研究を更に十五年延期したとて所期の目的を達し難いであらうと信じて、未熟のまゝ發表を見るに至つたので、新説に免れ難い缺點等については、豫め讀者の注意し置くべき處

であらう。

本書は之を三篇に分ち、第一篇(一一九五頁)に於ては、集合的精神生活の最も一般的なる原則を評し、第一に最も簡單なる例證として規律なき群衆の研究に着手し、次いで團體組織によつてなる、集合的精神生活の深奥なる變化を示す最も簡單なる例證として軍隊を論じ、第二篇(九六一—九九頁)に於ては、この原理を應用して、團體精神のすべての典型中、最も重要にして複雑、且つ最も興味あるものとして、民族精神の研究を試み、第三篇(二〇〇—二〇一頁)に於ては、民族的精神と性格とが、長期の中に漸次に建設せられ、形成せられて行く過程の一般的考察をなしてゐる。ル・ボン博士其他の集合心理を論せる多くの書物が、専ら程度の低き集團なる群衆の心理を論じ、團集生活に参加することは個人を低下し、群衆の感情、思想及び行爲は之を構成せる個人の水準に比して遙に低しと説けるに反し、著者はフイエのと共に、高度の集團の心理をも併せて論述し、團集生活に参加することは却て個人を完成し、その水準を高

むこと、之に多くの論議を費やしてゐる。そしてこの高度の組織團體と見るべきものは『民族』であつて、著者の所論の中樞である。故に著者の見解を知らんとするものは先づこの概念を明にせねばならぬ。近時、League of nations, association of nations, self-determination of nations, nationalism, and nationality などの言葉の流行せる折柄多少の参考ともならうかと思つて、余は今『What is Nation?』と題する一章について左に紹介を試みようと思ふ。

民族てふ通俗の概念を一層正確に定義しやうとする幾多の企劃は是迄なされた處である。この語は人種的に密接なる緣故(affinity)を有し、且つ習慣の似寄りたる原始民族フオクの大なる集團に屢々適用せられた。例へば北米のイロコイ部族又は中世の歐羅巴に侵入した匈奴族の如き之である。一般の慣用上では、之を近代の大なる民族的國家に限定するのが一層普通である。現在及び過去の人類社會は種々の組織と構造を有してゐたが故に、嚴密なる定義を立て、住民を明確に、この部門に

屬するものと否とに分つ事の困難を知らねばならぬ。

併し、斯の如き定義は立て得ずとも、吾人は實用上民族的國家、即ち最高度の發達を遂げたる民族を定義し、諸種の人民が、民族に特有なる性質の一部を示す限りに於て、民族の性質を有し、民族の典型に近づけることを承認し得る。國家が民族と同一に見られるに至つたのは民族的國家に於てのみ、換言すれば十分なる語義にいふ民族に於てある、そしてこの同視は、少數人民間に代議制度と民主的精神の發達せるによつて、専ら近代史上に於て到達したる所であるとして、著者はマンチェスター大學の近世史教授、ラムジー・ミューア氏の著述⁽¹⁰⁾を頻に引用してゐる。該教授の説は亦吾人の參考ともなるべきにより繁を厭はず之を引用しようと思ふ。

教授はいふ、『民族とは何ぞや。』『それは明かに人種と同一ではない。又國家と同一でもない。民族とは、ある緣故^{アライニチ}によつて自然に結び合はれてゐると思へる人民の一團であると假に定めてよから

民族とは何ぞや (問時)

う。この緣故は彼等に取りて頗る強固で且つ現實である、随つて、彼等は一緒に住へば愉快を感じ、分離すれば不満足に感じ、是等の結合を共有してゐない人々に服従するを忍び得ないのである。』⁽¹¹⁾然らば『民族を構成するに必要である所の緣故の結合とは何であるか』(一)一定の地域を占有せること、(二)人種の統一せること、(三)言語の統一せること、(四)宗教の統一せること、(五)組織立てる鞏固なる政府に長期間、共同に服従せること、(六)經濟的利益の共同團體であつて、且つ職業と見解を等うせること、(七)共通の傳統を有せること、即ち共同に苦難を凌ぎ、勝利を共にしたる事の記憶が歌謠、傳説に於て、又は民族の性格と理想とを體現せるやうに思はる、偉傑の親愛なる氏名、或は民族的記憶を祭れる聖地の名稱に於て表はされてゐること。』である。教授は最後の要素を本質的のものと見做して『これは民族を形成する一切の要因中に於て、最も有力なるもの、一つの缺くべからざる要因である』と説き、其他の六要素を軽く見てゐる。最後に、是等の特徴の何れに

よつても民族を定義し得ざるに及んで、『然らば、民族性は捕捉し難き觀念であつて、定義を定め難い。獨逸の教授連が好んでなす如くに、公式を以て驗證する事も、分析する事も出來ぬ。到底、殘忍にして幼稚なる種族説レイシヤリズムでは解釋され得ぬ。民族性の眞髓セントは情操である。そして最後に吾人は次の如くいひ得るのみである。民族とはその成員が情熱的に擧つて民族であると信じてゐるが故に民族である。併し、彼等がさうであると信じ得るは(一) 彼等の間に現實の、そして鞏固なる緣故が存し、(二) 彼等は人爲的に主張せられる所の、彼等を造り出せる混淆人種の原形に分離されず、(三) 彼等は、共同の宗教的信仰によつて最も平易に注入され得る如き、根本的道德觀念の共同の基礎を有し且つ(四) 彼等が共同の傳統を繼承せる事を光榮と誇り得る場合である。且つ之に共同の言語と文學並に共同の法制を加ふるならば、彼等の民族性は益々強固となるであらう。もし是等の結帶、或はそれ等の多くが、缺けてゐるときには、民族性の主張を維持する事が出來ぬ。蓋しこの主張が全人民

によつて一時共有されてゐたとしても、民族性の名に於て主張する所の自由と統一を享有せんとするや、忽ち彼等は四分五裂し、彼等の自由は彼等の滅亡となるであらうが故に』と、ミューア教授の到達したりと思はるゝ結論なる『民族とはその成員が情熱的に擧つて民族であると信ずるが故に民族である』てふ説(2)は支持し難きことをこの最後の句に於て明示してゐる。この誤れる根據の上に築かれたる民族性の權利を主張せる住民がある。この事實は民族性について稍満足し得べき定義を立つ事を必要とする。『吾人は漠然と各民族は自由と統一の權利を有する』といひ、又『民族自決』の原理を高唱するも、吾人が民族について定義し得ず、民族性の研究に没頭しつゝ、あつたこの近代史家が、一九一七年に、民族の語義を決定せんとするの計劃を放棄しなければならぬことゝなつたとすれば、如何にして、この原則を適用し得るであらうか。蓋し教授の興味ある論議の歸結は次の如くである。彼は自白していふ、『吾人は、この論議に於て、民族性に關して明々白々なる定義

を立つる事を得ず、又民族の自由を得んがために提起せられた主張の効力を十分に驗證することも出来なかつた。吾人は民族性の教理を抽象的權利の上に置くべきでない。吾人は彼等が民族であるといふ人民自からの確信で之がなければ、民族を構成する所のものが何であるかについて單一の誤りなき驗證を存しない事を認めねばならぬ。そしてこの確信ですら不十分なる根據の上に建てられ又は誤つてゐるかも知れぬ。』⁽¹³⁾

かくの如き不完全なる結論の結果は次の頁に示されてゐる、即ち『民族性は主として争闘によつてそれ自からを決せねばならぬといふ結論をとらざるを得ないやうである。その結論は歐洲の民族的觀念の歴史の基準モイラルとなりさうである。』吾人が言ひ得るはこれ丈けである、即ちある人民が自から民族であると言言し、民族性の權利を主張する際に方り、巴里講和會議の政治家は次の如くに答ふべきである。即ち『吾人は諸子の要求が十分なる根據を有するや否やを知らぬ。蓋し歴史家と政治學者は『民族』なる語の意味を吾人に示し得ぬ故に。行

いて争へ、そして諸子が殘存したらば吾人は「既成の事實」を承認し、諸子を一民族と呼ぼう」と。

かく、ミューア教授の困惑せる有様を詳述した後、著者は歴史家や政治學者では之を論ずるに十分ではない、之には多大の研究準備が必要であるとし、更にいふやう、教授の説は本問題が本質的に心理學的性質のものである事を承認するの效績があつた。即ち、彼のとれる假定義は全く心理學的のもので、民族性の眞髓は情操センチメントであるといつてゐる。然るに彼は又、同じ章に、その眞髓は信仰であるともいつてゐる。故に彼の心理學的準備の不十分である事を示してゐる。民族たる事の七特徴を列記せる表を見ると、これは寧ろ民族性の發達に都合のよい條件を明かにしたものであつて、この表はもつと擴大されねばならぬ。彼は、『その眞髓は情操である』と説けるとき、最も眞理に近づいてゐるが、この情操の性質如何をも、又その對象の何であるかをも告げやうとしてゐない。

吾人は假りに或る相當の大いさを有する人民の團體を取つて、之を或る一定の領域に引き入れな

いで、民族を形成させやうと思つて見ると、上記七條件の各を悉く具備してゐても、更に又民族性に特有なる條件であると彼の説ける二條件、即ち強固なる感情(多分團體に對する忠誠の感情)と民族

たる事の熱烈なる信仰を有してゐたとしても、他の本質的條件を缺けるがために、悼ましくも、民族たること能はず、上記の運命に陥るであらう、即ち『彼等が民族性の名に於て主張する所の自由と統一を享有せんとするや、忽ち彼等は四分五裂し、彼等の自由は彼等の滅亡となるであらう』⁽²⁾

然らば、かくの如き人民が民族たるに缺く能はざる本質的の條件は何であらうか。ミューア教授の分析を免れた處の要因は何であらうか。著者、マクヅーガル氏はいふ。この解答は——組織^{フーガニゼーション}であらねばならぬ。これは物質的の組織ではなく、團體をして有効なる團體生活をなさしめ得る、即ち集合的審議^{コレクティブ・ディシジョン}をなし集合的意志^{コレクティブ・ウィル}を定め得るやうな精神的の組織である。民族性の定義の解決は、之を團體精神の概念の中に見出さるべきである。民族とは、或る程度の政治上の獨立を享有し

民族的の精神と性格とを有し、隨つて民族的審議と民族的意志を定め得る人民 (people or population) である、吾人は言はねばならぬ。

註一、Naval History and National History, by J. Holland Ro e, 1919, pp. 5-6.

註二、History and Historians in the Nineteenth Century, by G. P. Gooch, 2nd ed., 1913, p. 573.

註三、Die geistigen und sozialen Strömungen des 19. Jahrhunderts von Th. Ziegler. Volkssang. 1911. S. 524.

註四、Moderne Geschichtswissenschaft, von Karl Lamprecht, 2 Aufl., Berlin, 1909, S. 1.

註五、Group Mind, p. 104.

註六、G. Le Bon's Psychology of the Crowd; Evolution psychologique des peuples; Sighele's La foule criminelle; A. A. Marie's Psychologie Collective.

註七、Alfr. d Fouillée: La Science Sociale Contemporaine.

註八、Group Mind, p. 20.

註九、Nation の譯語、Ramsay Muir: Nationalism and Internationalism, London, 1917. 本書は、多少嚴格的色彩を帯びてゐるけれども、この

主題を論べる書物中、吾人の參考に資するものの一つである。

十一、上巻三十六頁。

十二、慶大教授川合先生は『民族心理學の始祖』といふべき編
述の『サルス』の説に同意せられて、『然らばサルスはど
考へたか』と云ふと、かうである。人種とか、部族とか、民族
とか、家族とか云ふ自然の區分の中に、精神、自由、歴史が
入つて來て自然的には異つてゐるものを混じ或は之を相互に
似寄つたものにする。蓋し精神的の同不同は血族關係とは別
なものであつて、民族の概念は自然に與へられた差別に精神
的歴史的關係が交渉する所から起つて來るのである。で、民
族をして民族たらしむる所ものは本質上血統とか言語とか
云ふやうな客觀的關係其物に存してゐるのではなくして、唯
自から同一民族に屬してゐるものと考へる民族の成員の主
觀的見解に存してゐる。『それから渠はかう云ふやうな事を
言つてゐる。民族といふものはそれに屬する個人の精神的産
物である、個人は民族でないが絶えず民族を創造する。精密

に言ふと民族は民族精神の第一の創造物である。何故かと云
ふと個人は個人として民族を創造するものではなくして其の事
立を棄て、始めて民族を創造するからであると、『慶應義塾
和歌山講演』五七頁、と説かれてゐる。其の前半はミューア
教授の説に近く、後半は、氏の説に近い。

十三、上掲、五四頁

十四、上掲、五一頁

間 崎 万 里